

DEATH NOTE(デスノート)(前編)

2006(平成18)年6月21日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝金子修介／原作＝大場つぐみ、小畑健『DEATH NOTE』（集英社ジャンプコミックス刊）／出演＝藤原竜也／松山ケンイチ／瀬戸朝香／香椎由宇／細川茂樹／戸田恵梨香／藤村俊二／鹿賀丈史／声の出演＝中村獅童（ワーナー・ブラザーズ映画配給／2006年日本映画／122分）

……若者に大人気のカリスマコミックの映画化は、興行的には大成功！ 劇場内は若者でいっぱい。そしてポップコーンだらけ……？ 法の正義の無力さを痛感した主人公は、「デスノート」によって犯罪者を死亡させ、理想的な社会を築いていこうとする。これは正義なのか、それとも大量殺人にすぎないのか……？ ドストエフスキーの『罪と罰』並み（？）の大テーマが、宗教と無関係にゲーム感覚で語られることに多少の戸惑いを覚えるが、さて、あなたの評価は……？ 天才「ライト」と天才「エル」との出会いが、前編のラスト。さて、今秋公開の後編での決着はいかに……？

若者の大人気にビックリ！

私はこの映画の予告編を10回近く観たが、特に興味を持つこともないまま、公開翌日6月18日（日）の3時50分の上映分を観るべく、その30分前に梅田ピカデリーに着いた。すると既に「満席」で、次回6時40分上映分なら席があるとのことだった。そこで、急遽4時30分からのナビオ TOHO プレックスでの『LIMIT OF LOVE 海猿』（06年）に行ったわけだが、ここではじめて『DEATH NOTE』への若者の人気ぶりに気づき、ビックリ。

そこで、今回6月21日（水）6時40分上映分については、昼の間に指定席を確保したうえで劇場に入ったが、ほぼ100%の満席状態。しかも、その95%は若者という超人気ぶりにあらためてビックリ！

ポップコーンと弁当の制限は……？

95%が若者ということは、その50%がアベックで、30%は女同士、そして20%がその他という分布……？ アベックのポップコーン好きと、女性グループの弁当持ち込み+ペチャペチャ話はいつものことだが、それが劇場内の大部分を占めると、少なくとも予告編の上映中は劇場内はザワザワ状態。全くスクリーンに集中できる雰囲気ではない。

「テアトル梅田」などでは、上映前に「上映中の食事やおしゃべりはご遠慮下さい」と注意されるが、梅田ピカデリーほどの大劇場になるとポップコーンの販売も大切だから、あまり食事制限はできない様子。いつも思うのだが、なぜ若者たちは映画鑑賞とポップコーンを条件反射的に結びつけてしまうのだろうか？ またその購入ぶりを見ていると、男が女のご機嫌をとるように買っている姿が目につき、日本男児の軟弱ぶりにはいつもあきれている。それはともかく、いくら大きな劇場でも本編上映中のポップコーンと弁当はやめさせなくちゃ……。

若者の行儀の悪さ その1

私の指定席は、いつも最後列の真ん中。しかるところ、今日は予告編が始まると同時に、すぐ斜め前の席に2人連れの女性が入ってくるや、おもむろに鰻井弁当を広げ、おしゃべりしながらゆっくりとそれを食べ始めた。笑い声もあげながらの2人での楽しそうな腹ごしらえは、予告編の間に済ませてしまおうという意図は全くなし。したがって、本編の上映が始まっても、時々箸を口に持っていくのは同じで、おしゃべりこそなくなったものの、ウナギのニオイはすぐ後ろの席まで……。

若者の行儀の悪さ その2

そのうえ、私の右側にいたアベックの片割れの男は最悪。通常、アベックの男が隣に座ると、おおむね女の方に体を寄せていき、場合によれば手を握ったりしているから、その分私の席が広がって楽。今日もモロにそんな体の向け具合だったので、ラッキーと思っていたら、そうではなかった。今ドキの若い男は、一

時にたくさん食べられないのかどうか知らないが、予告編上映中にポップコーンはまだ少ししか食べていなかったらしく、本編の上映が始まって10分ほど経つとポリポリと食べ始め、また10分ほど経つとポリポリ。私は数回右を見て、無言の圧力をかけてやったが、それでも何の変化もなし。大音響のシーンの時に、迷惑にならないように食べるのならともかく、そんな周囲への気遣いは全くなく、あくまで自分のペースで食っている様子。そこで3回目、さすがに頭にきた私は、「上映中は食べるのはやめたらどう……」と恐る恐る口頭注意……。

これは私にとっては、かなり勇気ある決断。だって、逆ギレされたら怖いもの……。隣にはいくらブスだといっても(?)彼女が座っているのだから、その前(横?)で「恥をかかされた」などと思われて、「何じゃこりゃ!」と言われることは、もちろん覚悟の上。現に「道頓堀東映パラス」では、あるオバさんから猛烈な反撃を食らったこともある。そんな私の口頭注意に対して、その若者はどう対応したのか、それは皆さんのご想像におまかせしよう……。

カリスマコミックに注目!

私は全然知らなかったが、原作のコミック『DEATH NOTE』は、集英社「週刊少年ジャンプ」で2003年12月から連載が開始され、2006年6月現在、単行本11巻までのトータル販売数が1500万部を突破しているカリスマコミックとのこと。「デスノート」とは、「死神」リユーク(中村獅童)が持つノートで、「このノートに名前を書かれた人間は死ぬ」というもの。こんなノートが恣意的に使われたらエライことだが、原作が強い支持を受けているのは、このノートを手にした主人公、夜神月やがみライト(藤原竜也)のキャラクターによるところが大……?

ヒーローのキャラは……?

ヒーローのキャラについての最大のポイントは、法の正義を信じようとしながら現実にはそれが無力なことを知った彼は、「デスノート」を手にしたため、自らの手で世の中の犯罪者を裁くことによって、犯罪のない理想的な社会を築こうと決意する「善意の人」だということ。さらに「身分」上面白いのが、彼は警察庁の刑事局長である夜神総一郎(鹿賀丈史)の息子で、東応大学に通うエリート、

そして何でも将来の警視総監を嘱望されている天才だということ。さらに、コミック的なキャラとしては、当然美男子という設定！

そんなカリスマコミックのヒーロー夜神月役として白羽の矢を立てられたのは藤原竜也で、実に適役。弁護士生活32年の私の目から見れば、司法試験に合格しながら法の限界・無力さに悩む若き大学生という設定には少し無理があるが、理想と現実のギャップに悩む姿は共感できるもの。そんな大学生が偶然「デスノート」を手に入れたら、彼はどう行動すべきなのだろうか……？

ライトの選択はかなり正義に適ったもの、しかしその反面、次々と犯罪者を「デスノート」に記載して殺していく殺人者「キラ」は、正義のヒーロー、それとも凶悪な犯罪者……？

ライト VS エル (L、竜崎)

『DEATH NOTE』の原作が面白いのは、長嶋 VS 王、大鵬 VS 柏戸と同じように、ライト＝キラのライバルとして天才エル（松山ケンイチ）を設定したこと。頭の良さで天才ぶりは甲乙つけがたいが、ライトが美男子で何ひとつケチのつけようのないようなキャラであるのに対し、エルは服装や姿勢からしてだらしないうえ、いつもお菓子ばかり食べているケツタイな奴。しかし、その情報力・分析力・パソコンの画面を見抜く眼力は大したもの、彼はキラ捜査のため、インターポール（ICPO）が切り札として東京に送り込んできた男。彼はパソコンを通じ、声を変えた状態でしか捜査本部の夜神たちと話をしないため、その窓口となる初老の男がワタリ（藤村俊二）。こういうキャラのラインナップを見ていると、原作コミックがバカ売れしている理由が、少しずつわかってきた……？ そして、彼の分析力の鋭さも次々と……。

FBI 捜査官まで投入

原作コミックは、さらに FBI 捜査官まで投入している。それは、犯罪者の突然の死亡が世界的規模に拡大していく中、必然的なものかもしれない。しかし、映画上での取扱いは（多分原作でも同じだろう）刺身のツマのようなものだから、本場の FBI は怒ってくるかも……。そりゃ『羊たちの沈黙』（91年）や『ハンニ

バル』(01年)、そして『テイキング・ライブス』(04年)、『シネマルーム6』274頁参照)や『サスペクト・ゼロ』(04年)、『シネマルーム7』388頁参照)にみるFBI捜査官を見れば、その優秀さはすごいものだから、それに比べると、レイ(細川茂樹)やその恋人の南空ナオミ(瀬戸朝香)はかなり甘ちゃん……。現にレイは、ライトを尾行していることをすぐに悟られてしまううえ、まんまとライトの計算どおりに動かされたうえで、ハイお陀仏、となってしまう。ナオミはもう少し複雑だが、それでも(元?)FBI捜査官であれば、もう少し理知的の行動をとってほしいもの……。もっともこれは、この映画(原作)の主演をライトVSエルと設定しているためだから仕方なし……。まあ今回は脇役として、若い2人の引き立て役に徹してもらおうか……?

「捜査」よりも「ゲーム」の方が優位……?

「2人の若者」に対して、団塊世代の星で、キラ事件の捜査本部長に就任している夜神総一郎は日本の警察畑のエリートだから、捜査手法はあくまでオーソドックスなもの。しかし日本国内はもとより、諸外国でも次々と凶悪犯罪者が何の前触れもなく突然心臓麻痺で死亡していく事態を前に、一体どんな本格的捜査があるのだろうか……?

映画を観ていると、キラによる「無差別殺人事件」に対する夜神流の「捜査」がほとんど何の力も発揮できないことがありありと見えてくる。せいぜい、捜査本部のスタッフに対して語りかけてくるエルのパソコン上の声を感じて聞く程度のこと……?

その捜査本部に大きな動揺が走ったのは、FBI捜査官のレイのみならず、そのスタッフ十数名全員が同時に心臓麻痺で死亡したとの報告を聞いた時。つまり実名がわかると、犯罪者でなくともキラによって殺されるという危険が明らかになったわけだ。そこで夜神は、捜査本部の全員に向かって「ここで辞める者は辞めてもいい。辞めても何のマイナスもない。ただ命をかけてキラと闘うという人間のみ残ってくれ」と熱弁をふるったが、その結果は……。日本の警察官の義務感や責任感って、こんな程度……。これでは夜神流の「捜査」より、エル流の「ゲーム」感覚の追及の方が優位に立つのも当然……?

映画のみのキャラも登場

原作に登場するミサミサこと弥海砂^{あまねみさ}（戸田恵梨香）は、物語の展開に大きく関わっていく重要なキャラだが、映画前編ではそのサワリを見せるだけ……。それに代わって、原作にはなく、映画の前編（だけ）で重要なキャラを演ずるのは、ライトの恋人の秋野詩織（香椎由宇）。彼女は、ライトが「法は無力だ。キラが犯罪者を殺すことは正義だ」と主張するのに対して疑問を持っているため、スクリーン上では何度かその「論争」が展開される。まあ映画的には、こういう手法によって高邁な思想論争を若者たちにわかりやすく伝えようとする意図は理解できるし、かなり成功しているだろう。そんな彼女が、前編のハイライトシーンで演ずる役割とは……？

あなたはリュークが好き、それとも……？

日本の小説や映画では「死神」はわりとポピュラーな存在だが、当然ながら誰もそれを見た人はいないはず……。しかしコミックの世界では、死神を登場させようと思えば、その姿を自由に描くことが可能……。スクリーン上に登場する死神リュークが、コミック上のリュークと同じ姿なのかどうか私は知らないが、その姿カタチはまずまず……。このリュークの声を演じているのが、『男たちの大和/YAMATO』（05年）や『スピリット』（06年）など近時その活躍が著しい中村獅童だが、さすがにその名演ぶりは味がある……。？

前編では、他の人間には誰も見えないライトとリュークとの「2人芝居」が1つの見どころ……。もっとも、死神のリュークがやけに快活で、よく観ていると「いい奴」に思えてくることに多少の違和感を感じるとともに、彼の好物がリンゴ、というよりリンゴしか食べないというのは、なぜかサッパリわからない。こりゃ別に何の意味もないのでは……。？ そんなリュークのキャラを、あなたは好き、それとも……？

ラストの種明かしは……？

『DEATH NOTE』は6月に前編が、11月に後編が連続して公開されるというき

わめて異例の扱いになっている。そのためには前編のラストが重要だが、それはこの映画ではバッチリ。詩織のケイタイによって美術館に呼び出された挙げ句、ナオミの拳銃によって理不尽にも恋人を殺されてしまったライトが、以降キラ逮捕のために捜査本部に入れてくれと父親の夜神に頼むことになった。そしてそこに、「一緒にキラ逮捕のために闘いましょう」と言いながら登場してきたのがエル。この、若き天才同士の「にらみ合い」でのラストというのは、すごく気がきいていてベスト……。

ところが、私が大いに疑問に思ったのは、美術館の中できり広げられた詩織を人質として拳銃を突きつけたナオミとライトとの対決の「内実」を、ライトがすべてリュックに種明かししてしまうこと。前編ではこの種明かしをしないまま、その疑問を後編につなげていった方がよかったのでは……？

少なくとも、『インファナル・アフェア』3部作のつくり方はそういう感じだったと思うのだが……。

2006(平成18)年6月23日記

ミニコラム

個人的活用派？それとも社会的活用派……？

名前を書くだけでたちまちその人が死ぬ。そんな便利な(?)「DEATH NOTE」が手に入れば、誰でもその活用法に悩むはず。法の無力さと限界に絶望した若き法学徒ライトは、それを法による処罰を免れている「クズ人間」に向けて活用したから、これはいわば社会的活用法。他方人間は本来罪深いものだから、個人的な恨み・憎しみ・嫉妬から「殺してやりたい」と思う相手が1人や2人はいるはず。そんな人がノートを入手すれば真っ先にそ

の人の名前を書くはずだから、これはいわば個人的活用法。ノートの個人的活用は誰でもできるが、その社会的活用のためには誰を抹消すべきかという難しい判断が不可欠だし、さまざまな情報の収集整理や比較検討が大切だから、世の中の多くのことについて勉強が必要。したがって、DEATH NOTEを入手した者はすべからずその努力を続け、社会的活用を目指すべきだと私は思うのだが……。

2006(平成18)年11月22日記